

西田哲学と「地球村」構想

統一思想と多くの共通点

評論家 井上茂信

＝軍の「御用学者」と誤解された西田幾多郎＝

ポスト冷戦の世界の最大の問題の一つはナショナリズムと国際主義の調和である。冷戦が集結し、超大国の圧力が減じるとともに、たちまちそれまで抑えられてきた民族主義や宗教エゴが世界各地で爆発し、地域紛争が多発しているからだ。民族、宗教間の調和と平和共有は不可能なのだろうか。可能だとすれば、どのような発想が必要であろうか。特殊性か普遍性か、多様性か統一性か、さらにはナショナリズムか国際主義かが問われている今日、これら両者間の調和の道はないのであろうか。

この課題に一つの解答を与えているのが西田哲学であり、しかも注目されるのは、西田哲学が統一思想と多くの点で共通点を持っていることである。

西田哲学とは、戦前、京大の教授であった西田幾多郎（1870－1945）が考え出した哲学で、その代表作『善の研究』は戦前、戦中の学生が夢中になって呼んだ哲学書の一つである。だが敗戦後長い間、西田哲学は日本の思想界で無視されつづけてきた。西田はわが国と太平洋戦争の破局へと押しやった日本軍部の「大東亜共栄圏」構想を哲学の面で支えた「御用学者」と誤解されてきたからである。

だが、西田哲学の本質は決してそのようなものではない。軍部が戦争遂行のために西田の主張を曲げ、天皇中心の日本の特殊な国体を他国に押しつけることが日本の使命だと論じているかのように宣伝したのである。

西田哲学の本質はもっと深いものであった。軍部の解釈とは逆に、それぞれの国が各自の好き文化的特色を発揮し合うことによって、互いに貢献し合い補完し合うことによる「地球村」的な国家共同体の構築に当るべきことを西田は理想としたのであった。

＝近代主義の崩壊で再浮上の西田哲学＝

ところで現在、日本の思想界で西田哲学の再評価が行われている。時代は遠く離れているにも拘らず、西田哲学はなぜ再びクローズアップされているのだろうか。

その理由について、哲学者の梅原猛氏（国際日本文化研究センター所長）は「新たな哲学が時代を救う」のタイトルで、ポスト共産主義の混乱と資本主義の退廃の中で、近代主義の崩壊から人間と世界を破滅から救う哲学の一つとして、西田哲学が現代的意味を帯びて再登場した背景を、以下のように論じている（注1）。適切な論評である。

「戦後の日本の哲学は、西田のように東洋と西洋を総合し、そこに新しい自分の哲学体系を創造しようとする野望を捨てて、西洋哲学の研究というつつましい仕事に自己を限定して、ささやかに生きてきたのである」

「しかしながら、時代は哲学より先に進んだ。一部の哲学者が絶対の真理であると思っていたマルクス主義によって指導された社会主義がみごとに崩壊したのである。この状況に、かつての自信に満ちたその布教者達は、今日ただ茫然自失して歴史の行方を眺めているように思われる」

「ところがさらに劇的なことは、社会主義が崩壊した後、にわかに資本主義社会が危なくなってきたことである。最近の欧米諸国における経済的不振、道徳的混乱は近代という時代がまさに瀕死の病を病んでいることを物語っている」

「このような状況の中で哲学が求められ、人間や世界をどう考えればよいか、という問いが根本的に問われているのである。その意味で、今世界は哲学を求めている。ポストモダニズムなどはそういう思潮の表れであるが、私の見るところ、それは近代主義の批判として正しいものの、新しい人間と世界の理念を確立しているとはとても思えない」

「このような歴史の中で、日本においても新しい哲学が求められているであろう。そして日本独自の哲学を創造した哲学者の例として、西田幾多郎が懐かしく想起されるのである」

「哲学は、自分で人間とは何かとか、世界とは何かを思索し、自分で体系を立てるという宿命をもっているものであり、西田はまさに哲学の王道を歩いていたのである」

「しかも日本人が思索する以上、日本の伝統を生かすのは当然である。西田は、日本の伝統を禅という一点で押さえ、禅の体験と西洋哲学の論理を総合させたが、西田こそ明治以来の最初の日本の哲学の創造者であった」

「重要なことは西田をそのまま祖述したり称揚したりすることではなく、もう一度、近代主義の崩壊という時点に立って、西田のように人間や世界について真剣かつ深く考え、そこから人間と世界を破滅から救いだすような哲学体系を作り出すべきである」

＝禅体験生かした日本独特の哲学＝

梅原論文には重要な問題点が二点ある。一つは西田哲学は禅の体験を生かした日本独特の哲学であるという点である。

西田哲学と禅の関係について。西田哲学研究の第一人者、下村寅太郎氏は次のように述べている（注2）。

「直観を自学的に裏付けるようにすることが先生の三十歳代十年間に亘る打坐の工夫であった。『善の研究』の成るまでの十年間の（西田の）日記は読書省察と同時に不断に『打坐』（注：坐禅のこと）のことが記されている。『善の研究』の、やがてまた西田哲学一般の基礎には禅的体験がその重要な思想的動機の一つとして存するように思

われる。西田はこの時代を通じて、金沢市卯辰山麓にあった洗心庵雪門和尚に師事した。寸心なる西田の居士号も和尚から与えられたものである。金沢時代の十年の間、不断に打坐し、春夏の休暇には殆んど常に禅堂に在り、しばしば遠く京都の妙心寺の接心会に参加、前後十年を通じて家庭で正月を迎えたことは殆んどなく、禅堂での『打坐越年』のことが日記に記されている。」

なお西田は石川県河北郡宇ノ気町生まれ。初め師範学校に入り、途中で中学に転じ、金沢の第四高等学校に入学。同校を中途退学し、東京文科大学哲学選科に入学。このころから禅の道に入り、鎌倉円覚寺、建長寺などで参禅。1894年卒業。金沢での中学の牧師生活を経て、第四高等学校、山口高等学校の教師となり、1899年に第四高等学校教授となり、1911年に処文作『善の研究』を発表した。

梅原論文の重要点のいま一つは、西田哲学が近代主義の崩壊の時点から見直されていることである。ところで近代主義の崩壊とは何か。梅原氏とインド哲学者中村元氏は対話談「『こころ』『歴史』から探る」の中で、ポスト・マルクスの資本主義社会の混乱について、要旨を次のように述べている（注3）。

マルキシズムは崩壊したけれども、今度は近代主義がおかしくなってきた。資本主義は近代主義の理論でやっているわけですが、自我を絶対化し、その中心に理性を置いた西洋近代哲学の考えが急速に崩壊してきて、いろいろな混乱を生んでいる」（梅原）

「近代化とは何かというと、政治、経済の重視ですね。その基本にある思想は一種の唯物論ですよ」（中村）

「いま近代の最先端を進んでいるはずの国家が崩れてきた。近代社会における人間は理性的な人間のはずなのに、実際は欲望人である。古代人や中世人に比べ、むきだしの欲望を持った人間になっている。近代主義はいま音をたてて崩壊している」

「洋の東西を通じて言えることですね。我々は近代化に遅れた、近代化のためには個我の確立が心筈だ、と言ってきた。個我の確立というのは、個人的な欲望を無理に拡大して、他人との摩擦も厭はないで、とにかく自己を主張せよということに解せられましたですね。自己というものが偉大な宇宙との相互連関のもとに成立していることは無視して、孤立的な自己の権利や欲望を満たそうと進んできたんですね」（中村）

「デカルトは神様を棚上げにした。神様はいらない、自我だけで良い、自我の中心は理性だと。ところが、自我の中心は理性じゃないんですね。そこでカントは、自我は単なる理論的自我、科学的な自我ではいけない、実践的・道徳的な自我でなければいけない、と言っている」（梅原）

「自然環境の破壊が現代の大きな問題になっています。これも、自我を立てて、自然を対象化して征服し、人間支配を拡大していこうとする思想が間違っていたんでしょうね」（梅原）

「自然環境は人間に支配されるべきであるという前提のもとに、西洋民族の世界支配、世界侵略が始まったわけです。日本もそのしり馬に乗ったところがありました。科学・技

術は両刃（もろは）の剣のようなもので使い方が難しい」（中村）

「宇宙との相互連関を忘れた自我の絶対化が現在の病因という指摘は正しい。すなわち、全存在の根底にある大宇宙の精神法則、あるいは神を棚上げして、その代わりに自我を中心に置いた西洋の近代思想が導き出したのは、資本主義の発達と結びついた物質的、肉体的欲望中心の社会であった。そして、その行きつく先がエイズの蔓延（まんえん）に象徴される資本主義社会の道徳の退廃である。こうして、いま近代主義の欠陥として問われているのは、①価値の中心を欠いた民主主義社会での自由の乱用 ②金銭万能の風潮をもたらした私利私欲の固まりのような人間を生んだ資本主義 ③環境破壊と唯物思想をもたらした科学・技術万能思想 ④道徳的アナーキズムを生んだヒューマニズム思想と価値多元論などである。要するに近代主義の根本的欠陥は、自我や科学的合理主義が中心となり、絶対的な価値の中心を失ったことだ。

＝ 1940年代と90年代との相似性＝

ところで注目されるのは、西田哲学が日本の思想界や軍部に注目され、学生たちが熟読した1940年代も、近代主義の破綻とその超克の必要性が日本の課題となっていたことだ。この点で、1940年代と90年代には一種の相似性があり、このあたりにも西田哲学が50年後の今日、読み直されている理由があるといえよう。

まず、1940年代の日本では、アジア経済圏のブロック化による自立経済圏確立を目指す「大東亜共栄圏」構想が論じられていた。そして、大学の経済学部では「アウトルキー（自給自足）経済論」が講義されていた。政治面では、40年代は第一次大戦で敗れたドイツの戦争責任を追及して過酷な賠償を取り立てたベルサイユ体制が終えんして、世界が新秩序構築の模索期に入った時期であった。ドイツでは、悪化した経済情勢を背景に過激な民族主義を掲げたナチスが台頭し、欧州情勢は風雲急を告げていた。アジアでは中国大陸の覇権をめぐる後発帝国主義国家の日本は米英勢力と対立し、A B C D（米英中蘭）の経済包囲網の形成によって孤立化しつつあった。

90年代の今日はどうか。一つの特色は、40年代と同様に世界経済のブロック化が進んでいることだ。E C（欧州共同体）とかN A F T A（北米自由貿易協定）の形成がその象徴的なものである。政治についていえば、ベルサイユ体制にあたるのが、第二次大戦での敵国日独の戦後処理を連合国が定めたヤルタ体制であった。そして、同体制は東西冷戦によって終えんし、さらに、それに続くソ連邦の崩壊により現在、新世界秩序構築の模索が続いている。40年代に日本はアジア侵略で政治、経済的に世界から孤立したが、現在の日本は経済の「ひとり勝ち」によって世界で孤立化し、A B C D包囲網に代わる米国の円高攻勢で苦境に立たされている。さらに政治面では、一國平和主義的な対外姿勢によって日本はその国際責任感の欠如が問題視されている。

＝欧米の植民地支配の理論とみなされた近代主義＝

ところで、40年代の日本でも90年代と同様に「近代主義の超克」が問題となっていた。その問題は「資本主義の超克」、「民主主義の超克」、「自由主義の超克」の三つであった。

なぜなら、西洋の近代主義を代表する資本主義、民主主義、自由主義の三本柱は当時の日本人の目から見ると、アジア・アフリカ、中南米諸国に対する欧米の植民地政策に象徴される白人諸国の弱肉強食の外交政策を正当化するための、西洋の論理に過ぎないと思えた。

すなわち、自然淘汰と過者生存を生物学的に解明したダーウィンの進化論を背景に、資本主義はアジア・アフリカの有色人種の国々に対する白人諸国の植民地化政策を正当化するための論理として編み出されたものと、40年代の日本ではみなされた。また、民主主義は当時の日本人の目から見ると衆愚政治に過ぎず、自由主義は道徳原理に反する放縦思想とみなされた。こうして西洋の近代主義が生んだ資本主義、民主主義、自由主義の三本柱は排除すべき思想で、世界の恒久平和をもたらすべき道義な力を持っていないと当時の日本では考えられた。

さらに、40年代の日本では、第一次大戦は先進資本主義諸国と後発資本主義諸国の市場争奪のための戦いという、資本主義に内在する矛盾の露呈とみなされた。この点で注目すべきは、40年代の日本では軍部内の革新論者、国粹派の右翼、マルキシズムを信奉する左翼の主張に多くの共通点があったことだ。すなわち、反資本主義、反民主主義、反自由主義の点で彼らは共通していた。そして、彼らはひとしく反英米、反財閥、アジアの植民地解放などをとなえた。これらは二・二六事件の革新将校の一人、栗原安秀中尉の獄中手記や北一輝などの主張などからも明らかである。だからこそ敗戦の色濃くなった1945年2月14日に元首相の近衛文磨は天皇への上奏文のなかで「いわゆる右翼は国体の衣をつけたる共産主義者なり」と言上している（注4）。

こうして、40年代の日本の思想界では反米英の視点から「近代の超克」の課題達成が最大のテーマとなり、その結果、欧米思想に代わるものとして東洋思想とくに日本的な思想や哲学へと人々の関心が向けられていた。こうして、当時の日本でクローズアップされた思想家が「アジアは一つ」と唱えた岡倉天心（1862－1913）と西田幾太郎であった。

ところで、くしくも90年代の今日も、別な意味で「近代の超克」が大きなテーマとなっている。さきにあげた梅原猛氏と中村元氏の対談でも明らかのように、マルキシズムは崩壊したが、ポスト・マルクスの今日、民主主義、資本主義、自由主義のいずれも世界救済の思想としての魅力を失いつつあるからだ。その結果、西洋の近代思想への批判が高まり、西田哲学が再評価されつつあるのだ。

＝皇室中心主義の押しつけに西田を悪用＝

ところで、問題は40年代に西田哲学は日本の軍部によってどのように曲解されたかである。当時の政治状況を見ると、軍部は天皇の統帥権を利用して、天皇の名において議会や内閣を押し潰そうとして積極的に動いた。官僚わけてもひそかにマルクス主義思想を抱いていた、いわゆる革新派の官僚たちは、戦時体制は来たるべき共産主義社会機構のための基礎的体制を整備するのに役立つと考えた。さらに彼らは「東亜民族解放戦」に「進歩的意義」を見いだすと考えた。こうして彼らは軍部と相呼応して、国家総動員体制とアジア進出体制の合理化をはかろうとしていた（注5）。

こうして五・一五事件（1932年）、二・二六事件（1934年）を経て、政界に対する軍部の支配は急速に強化され、やがて国家総動員体制がしかれ、「大東亜共栄圏」が提唱され（1940年）、日本は「大東亜戦争」（太平洋戦争、1941年）へと突き進んでいった。

太平洋戦争を思想面で合理化するものとして、1940年に「大東亜共同宣言」が出された。そして、同宣言の正当性を思想面で裏付けるものとして西田幾太郎の講演が軍部によって利用されたのである。

西田の講演はどのようなものだったのか、西田は「大東亜戦争」が始まって一年以上たった1943年「国策研究所」で要旨以下のように講演した（注6）。

「…20世紀はいかなる自覚の時代か。世界的自覚の時代なのである。各民族国家がこの自覚に達したとき、どのような国作り、世界構成を行うだろうか。何れの国家・民族も、それぞれの歴史的地盤に成立し、それぞれの地域伝統にしたがって、まず特殊的世界を構成するようになる。そして、その結合により一つの世界的世界へと導かれる。この世界的世界では、各国家民族が各自の個性的な歴史的世界に生きると共に、一つの世界的世界に結合するのである。これが今日の世界大戦によって要求せられる世界秩序の原理でなければならない。」

「我が国の八紘為宇の理念とはこのごときものであろう。我が国体は、所謂全体主義ではない。皇室は過去現在未来を含む絶対的現存として、皇室が我々の世界の初まりであり、終わりである。皇室を中心として一つの世界的世界を形成してきたところに、万世一系の我が国の精華があるのである。我が国の皇室は単に民族的国家の中心というだけではない。わが国の行動には、八紘為宇の世界形成の原理が含まれているのである。」

軍部は西田のこの講演を曲解し、あたかも「皇室中心」の日本の国体をアジア諸国に押しつけることを提唱したかのように宣伝した。西田の言いたかったのは、各国にはそれぞれの地域伝統に従って国の個性を発揮することであり、軍部の宣伝とは全く逆であった。こうして軍部は朝鮮民族に対する「皇民化政策」の押しつけや、シンガポールに「昭南神社」を建設し、現地住民に礼拝を強制するなどして、日本文化の押しつけを行ったのである。

＝ 各国が特徴を発揮し合った上での世界主義を主張 ＝

それでは西田の本意はなんであったのか。それは西田の著書『善の研究』を熟読すれば明快である。西田の訴えたかったのは、各国家がそれぞれの文化、伝統に基づく特色を発揮し合って、その上で連帯し合うという形での「地球村」ともいうべき人類社会の大同団結であった。

西田は人類社会の大同団結について『善の研究』の中で次のように説いている（注7）。

「国家は今日の処では統一した共同体意識の最も偉大なる発現であるが、我々の人格的発現はここに止まることはできない。なお一層大いなる者を要求する。それは即ち人類を打して一団とした人類社会の団結である。此（かく）の如き理想は已にパウロのキリスト教において、またストイック学派において現われている。しかしこの理想は容易に実現はできぬ。今日はなお武装的平和の時代にある」

「遠き歴史の初めから人類発達の跡をたどって見ると、国家というものは人類最終の目的ではない。人類の発展には一貫の意味目的があって、国家は各その一部の使命を充す為に興亡盛衰する者であるらしい（万国史はヘーゲルのいわゆる世界精神の発展である）」

「しかし真正の世界主義というのは各国家が無くなるという意味ではない。各国家が益々強国となって各自の特徴を発揮し、世界の歴史に貢献するの意味である」

この論文の最後のところが重要である。西田は決して「皇室中心」というわが国の国体の特色を他国に押しつけようとしたのではない。各国家がますます強国となり、それぞれの伝統や文化に根ざした各自のよき特色を発揮し合い、人類社会に貢献することを真正の世界主義として提案していたのである。

この点では統一思想の説く所と共通点がある。統一思想では「個体目的」と「全体目的」の調和が説かれている、すなわち「全体的な目的を離れて、個体的目的があるはずはなく、個体目的を保障しない全体的な目的もあるはずはない。従って、森羅万象の被造物は、このような二重目的によって連帯し合っている一つの広大な有機体なのである」と説く（注8）。

＝ 個性実現こそ善と説いた西田 ＝

また統一思想は「個別相」を説いている。すなわち、各々の被造物の固有の特性の原因となっている神の属性を個別性と呼んでいる。そして「被造物は、それぞれ固有の属性を持っているが、ことに人間は著しくそれぞれの顔立が違い、体質も違い、性格も違っている」と説く、その上で「人間の顔立ちや性格が一人一人みな違うのは神の喜びのためである。すなわち神は一人一人の人間を通じて特有の喜びを得ようとされたのである」と説いた上で、「神の個別相が人間に現われたものが人間の個性である。したがって人間の個性は絶対的に尊重されなくてはならない貴重なものである」と説いている（注9）。

西田哲学もこれと同様に個性尊重が世界主義の出発点になっている。すなわち西田の説く「各国家が益々強国となり、それぞれの特徴を発揮し、世界の歴史に貢献する」という各国家の個性尊重の発想の出発点になっているのは「個人性の尊重」なのである。西田は『善の研究』の中で個性の尊重の大切さを以下のように述べている（注10）。

「我々の意識の根底には分析のできない個性というものがある。意識活動は凡て皆個人性の発動である。各人の知識、感情、意志は尽くその人に特有なる性質を具えている。意識現象ばかりでなく、各人の容貌、言語、挙動の上にもこの個性が現われている」

「肖像画の現わそうとするのは実にこの個人性である。この個性は、人がこの世に生まれると共に活動を始め死に至るまで種々の経験と境遇とに従って種々の発展をなすのである。科学者はこれを脳の素質に帰するであろうが、余はしばしばいったように実在の無限なる統一力の発言であると考え」

「それで我々は先ずこの個性の実現ということを目的とせねばならぬ。即ちこれが最も直接なる善である。健康とか知識とかいうものはもとより尊ぶべき者である。しかし健康、知識、其者が善ではない。我々には単にこれにて満足はできぬ」

「個人において絶対の満足を与える者は自己の個人性の実現である。即ち他人に模倣のできない自家の特色を実行の上に発揮するのである。個人性の発揮ということは、その人の天賦境遇の如何に関せず誰にでもできることである」

「いかなる人間でも皆各々その顔の異なるように、他人の模倣のできない一あって二なき特色をもっているのである。而してこの実現は各人に無上の満足を与え、また宇宙進化の上に欠くべからざる一員とならしむるのである」

「従来世人はあまり個人的善ということに重きを置いておらぬ。しかし余は個人の善ということは最も大切なもので、凡そ他の善の基盤となるであろうと思う」

「真に偉人とは、その事業の偉大なるが為に偉大なるのではなく、強大なる個人性を発揮した為である。高い処に登って呼べばその声は遠い処に達するであろうが、そは声が大いのではない。立つ処が高いからである。余は自己の本分を忘れ従らに他の為に奔走した人よりも、能く自分の本色を発揮した人が偉大であると思う」

＝ 個人主義と利己主義を峻別せよ ＝

西田哲学は難解とされているが、前述の論旨は極めて明快で平易である。西田は神を「実在の統一力」としているが、人々の個性こそ実在の無限なる統一力の発現と述べている。統一思想のいう、個性は神の属性である個別性の人間において現れたもの、という発想と共通している。

そして「個性の発揮こそ善である」としている。この個性の発揮は、個人についても国家についても西田は強調している。この点で彼の思想は一貫している。それぞれの個人には他人が真似できない一あって二なき特色にあり、そのような個性の発揮が宇宙の進化の

上で不可欠であるとする。これは国際社会についても同じで、西田は「真の世界主義とは各国家がなくなるという意味ではなく、各国家が益々強国となり、それぞれの特色を発揮し合って、世界の歴史に貢献する」という形で各国家の個性と世界主義の両立による「地球村構想」を打ち出しているのである。

そして西田は「個性発揮こそ善」という思想をさらに噛み砕いて、個人主義と利己主義との区別を次のように強調している（注11）。

「個人的善というのは私利私欲ということと異なっている。個人主義と利己主義とは厳しく区別しておかねばならぬ。利己主義とは自己の快楽を目的とした、つまり我儘ということである。個人主義はこれと正反対である。各人が自己の物質欲を恣にするという事はかえって個人性を没することになる。豚が幾匹いてもその間に個人性はない。また人は個人主義と共同主義と相反対するようというが、余はこの両者は一致するものであると考える」

「一社会の中にいる個人が各充分に活動してその天分を発揮してこそ、始めて社会が進歩するのである。個人を無視した社会は決して健全な社会といわれぬ」

西田の主張は要するに「個体の目的」と「全体の目的」との調和である。国家も構成する各個人がその天分をフルに発揮してこそ、国家、社会は進歩する。同様に各国がそれぞれのよき特色を発揮し合った上で、連帯し合ってこそ、真正の世界主義つまり「地球村構想」がうまくいくというわけである。

だからこそ、日本軍部が曲解したように、日本文化の特色である天皇制や神道を諸外国に押しつけるのを「八紘一宇」としたのは全くの間違いだ。西田のいう真正の世界主義は国家がなくなることではなく。逆に国家国家が益々強国となり、それぞれの特色を発揮し合って世界史に貢献することである。これこそ個と全体の調和であり、ナショナリズム（特殊性・個性）と国際主義（普遍性・全体性）との調和である。

＝ 地球村は「交響楽方式」で ＝

これは一種の「交響楽方式」ともいえる発想である。すなわち、交響楽が成立するには、ピアノ、トランペット、ドラム、バイオリンなど、それぞれの楽器が各自の特色をフルに発揮し、しかも共通の楽譜、そして指揮者の下でそれぞれの役割分担を果すことが必要である。

各楽器を個人あるいは国家、民族と考えれば、西田のいうことがよく理解できる。国民一人一人が持って生まれた他人にはない自分たちの特性を発揮してこそ、国や社会は繁栄する。同様に各国家、民族もその特色を発揮し合い、他の諸国と補完し合うのが真の世界主義である。各楽器が共通の楽譜も指揮者もなく勝手に演奏された場合には、互いに相手の良さを封殺して、ただうるさいだけの騒音となる。同様に、各個人そして各国家、民族がてんでばらばらに自己主張すれば、国内はまともならず、世界は民族紛争、宗教紛争の

つぼと化してしまうだろう。

交響楽がすばらしいのは各楽器がそれぞれの独特の音色をフルに出し合いながら、共通の楽譜の下で共鳴し合い、壮大な一つのテーマを打ち出していることである。

このような個別相と普遍相の調和は花の世界にいついてもいえる。「花」というのは一つの普遍であるが、この世に「花」という「花」は存在しない。それは抽象概念に過ぎないからだ。「花」という普遍そして抽象は、桜、梅、バラ、牡丹といった特殊を通じてのみ実在化する。特殊を通じないで具現化する普遍はあり得ない。

一方、特殊はその中に必ず普遍を宿しており、普遍を持たない特殊はない。すなわち、なんの花でもない単なる「花」という「花」は存在せず、逆にそれが花である限り、たとえ道端の名もない雑草の花であっても、その中に花としての普遍性つまり美しさという「花」の要素を確実に保有している。その点、昭和天皇が、世の中に雑草という名の草は存在しない、といわれたのはまことに至言である。

＝ 人体構造が示す全体目的と個体目的の調和 ＝

同様なことは、人体についてもいえる。89年6月と9月に放映されたNHKテレビのサイエンス・スペシャル「驚異の小宇宙・人体」によると、人体は約60兆の細胞によって構成されている。これはわが銀河系6百個分の恒星の数に匹敵している。そして60兆の細胞が人体の各器官や組織を構成し、それぞれの個性的働きによる役割分担で人体の生命が維持されている。

人体という総体は普遍にあり、身体の各器官や組織は特殊にあたる。そして普遍と特殊は相対概念であるが、実際は身体の各器官や組織という特殊の集合によって人体という普遍が具体化する。しかも人体における総体である普遍と各組織にあたる特殊の関係は全体目的と個体目的の調和関係にある。

たとえば、白血球は白血球、赤血球は赤血球の役割分担を果たすことによって、互いに身体全体の生命維持の「ために生きている」。歯という特殊は珪瑯質で固く出来ており、噛み砕くという自己の特性に合った役割分担を果たしている。舌は食べものを飲み下すという自己の特性に合った役割分担を、胃は消化、腸は栄養吸収というそれぞれが持っている特性に基づいた役割分担を黙々と果たしている。個が全体のために役割分担を果たして生きているのが人体のシステムである。

ところで人体のシステムで個体目的が全体目的と調和していないのが、癌細胞である。癌細胞は自己の増殖のみを考えて身体全体の生命維持という全体目的を考えないエゴイズムを象徴するような存在である。こうして癌細胞の広がりによって、生命が失われ、結局、癌細胞も生存できなくなる。

西田哲学思想は、これと同じ理屈で、各国がそれぞれの国の歴史、伝統、文化に基づく特性をフルに発揮し合い、他国と補完し協力し合うことによって「地球村」建設に貢献し、

人類進化という普遍目的に寄与し得ることを訴えたのである。逆に、各国が一国の利益だけしか考えない偏狭なナショナリズムに落ち入り、領土拡張を試みた場合、結局、癌細胞と同様に自分も亡びてことを訴えたのである。

＝ 「為に行きる」思想が地球村の出発点 ＝

この世に多くの文化、伝統を持つ国々が多くあることは、花の世界に桜、梅、バラと多様な花があるように楽しい。これでこそ百花騒乱を我々は楽しむことができる。これこそが地球村である。戦前、戦中の日本の偏狭なナショナリズムは「桜以外は花ではない」と主張するようなもので、西田の考えとはおおよそかけ離れた思想だったといえよう。

このような西田の説いた個と全体の調和、とくに人体構造に見られる個体目的と全体目的の調和を宗教の点から明示したのが、統一思想の「為に生きる」思想である。

統一教会の文鮮明師は「全能なる、全知なる神は、この平和・幸福・理想・愛の本源の基準を『為に存在する』という原則の方向に定めざるを得なかったというのであります。こう考えてみた時に、理想とか、愛と平和、幸福は自分を主体として主管する、あるいは仕えさせるのではなくして、『為に生きる』『為にすべてを捧げる』という立場におきまして、真なる愛、真なる幸福、真なる平和、真なる理想が始まるというように、宇宙創造の原則をここに置いたのであります」と述べている（注12）。

＝ 宗教紛争の原因は「教宗」の発想 ＝

21世紀にかけて具体的な大きな課題は宗教ならびに民族紛争をどう解決するかである。現にポスト冷戦の最大の悲劇はボスニア・ヘルツェゴビナでの宗教紛争である。西田流にこれを解決しようとするればどのような発想が必要であろうか。

まず宗教と政治のかかわりである。アレキサンダー・ソルジェニーツィン氏は80年2月の論文『死に至る危険』の中で、「日々の政治は宗教の分野外であるが、宗教は国家の精神生活に適切な寄与を行うべきである」と述べた。確かに「祈禱書のみで国家統治はできない」（マキャベリ）というのは真実であり、政教分離は必要である。しかし、政治はその正しい導き手としてモラルの根元となる宗教を必要とする。この意味で政教分離の正しい解釈は政治と特定の宗派の分離であって、宗教全般との分離ではない。宗教が正しくないと政治が乱れるのである。そして宗教が正しくないとき宗教紛争が起こる。たとえばボスニア・ヘルツェゴビナ問題を含めた現在の世界の宗教紛争の大半は宗教エゴに原因があるといえる。「宗」とは「大もと」の意であり、言語表現を超えた根元的なもの、すなわち「愛」とか「仁」とか「慈悲」とかの言葉で表現されるもののルーツである。このルーツを人々に言葉で説くとき「教」になる。絶対的ないわく、いい難いものを言葉で言い表すから、民族、文化、伝統、風土差によって表現が違ってくる。これがいろいろな教養を

もった宗教、宗派が出た背景である。それは各国家や民族に独特の文化、伝統があるのと同じ事情である。

ところが、現在の宗教紛争は各宗教や宗派が「教」つまり己の教養にへばりついて「宗」を忘れたところに原因がある。ロシアの思想家ベルジャーエフはキリスト教が陥った悲劇として「宗教裁判の火刑の薪の山」すなわち異宗教や異端への迫害をあげているのは正しい。同様に、現在の宗教紛争は己のみを「正義」として異教徒を迫害し殺りくしているところから来たものである。

したがって、宗教紛争の解決点は、すべての宗教、宗派が教義や教義の解釈が違っても、教義は単なる「宗」に至る手だて、方便であることを認識し、「宗」つまり根元の真理探究とともに復帰し、協力し合うこと以外にはない。なぜなら、神の名において戦うこと程、神を悲しませることはないからだ。

文鮮明師は前記の講演の中で「『為に存在する』というある教派があったなら、他の教派に対して、その教派以上に尽くせ。そうすれば、そこにおいては一つになる。あるいは異教の信徒に対して、その宗教が主張するその精神以上の尽くし方をすれば、その宗教まで一つとすることができるのです」と述べている。文師はかねてから「神は一民族、一宗教を超えた方であること」を強調し、宗教エゴを否定しているからである。そのため、統一運動が世界の各宗教の底辺にある共通基盤を記述した、「世界教典」を出版した今日の意義は大きい

＝ 修身齊家治国平天下をとく西田哲学 ＝

次に大きな課題は民族主義の克服である。西田哲学はこの点について「修身齊家治国平天下」（家庭こそ道德の始まり）の思想の哲学的裏付けを行うことで世界平和の処方箋を打ち出している。

先に述べたように、西田は個人性こそ実在の無限なる統一力即ち神の発現であるとして、「個人性の実現こそ最も直接の善」と強調した。同時に西田は「我々の要求の大部分は凡て社会的である。（中略）我々の生命欲も主なる原因は他愛にあるを似て見ても明らかである。我々は自己の満足よりもかえって自己の愛する者または自己の属する社会の満足によりて満足されるのである。元来我々の自己の中心は個体の中に限られたる者はない。母の自己は子の中にあり、忠臣の自己は君主の中にある。自分の人格が偉大となるに従って、自己の要求が社会的となってくるのである」と述べている（注13）。要するに、西田は「社会的善」の概念を持ち出し、人間の善への要求は個人性の実現からさらには人類社会の団結の要求まで階層的に上昇していくべきことを説いたのである。そして、その第一歩は家族であるとして次のように述べている（注14）

「家族とは我々の人格が社会に発展する最初の階級といわねばならぬ。男女相合して一家族を成すの目的は単に子孫を遺すというよりも、一層深遠なる精神的（道德的）目的を

持っている。(中略)個人的男女は完全なる人でない。男女を合した者が完全なる一人である。(中略)男女の両性が相補うて完全なる人格の発展ができるのである」

なお、西田は「元は男女が一体であったのが、神によって分割されたので、今に及んで男女が相慕う」というプラトーの発想を興味深いものとして紹介している。さらに「家族に次ぐ人格的発展は国家なり」と西田は次のように説く(注15)

「家族に次いで我々の意識活動の全体を統一し、一人格の発現と看做すべき者は国家である。(中略)我々の個人はかえって一社会の細胞として発達し来たったものである。国家の本体は我々の精神の根底である共同体意識の発現である。我々は国家において人格の大なる発展を遂げることができるのである。」

さらに国家の次の、個人の人格的発展は人類社会の団結なりと西田は次のように説く(注16)。「国家は今日の処では統一した共同的意識の最も偉大な発現であるが、我々の人格的発現はここに止まることはできない。なお一層大なる者を要求する。それは即ち人類を打って一団とした人類的社会の団結である。(中略)国家というものは人類最終の目的ではない」

それでは、なぜわれわれは自愛から他愛に向うのか、その哲学的根拠について西田は次のように説く。

まず彼は「神は宇宙の統一者であり、実存の根本である」と説く。さらに人間の心が自愛から他愛に向うのは神からきたものと次のように説く(注17)

「元来無限なる我々の精神は決して個人的自己の統一を以て満足するものではない。更に進んで一層大なる統一を求めねばならぬ。我々の大なる自己は他人と自己とを包含したものであるから、他人に同情を表わし他人と自己との一致統一を求むようになる。我々の他愛とはかくの如くして起ってくる超個人的統一の要求である。故に我々は他愛において、自愛におけるよりも一層平和と喜悦とを感ずるのである。而して宇宙の統一なる神は実にかかる統一的活動の根本である。我々の愛の根本、喜びの根本である。神は無限の愛、無限の喜悦、平安である。

統一思想でも神は愛の根元であると説いている。すなわち神の属性の中で一番の核心になっているのが心情であり、心情とは「愛を通じて喜びを得ようとする情的な衝動である」と説く。さらに人間は神に似せて造られたから、人間も愛を通じて喜びを得ようとする情的な衝動を持っていると説く(注18)。

統一思想では「三大祝福」を説き、個人完成(個体完成)、家庭完成、主管性完成(心情を中心とする自然と社会を主管する能力を備える)ことを説いている(注19)。

西田のいう人格の発現は唯一無二の個人性の実現から家庭完成に進み、さらに国家のためから人類社会の団結のためにつくす、という上昇過程を説いている点も統一思想と規を一つにしている発想といえよう。

＝ ネーション・ステートよりも多文化主義を ＝

ところで、民族紛争の一つの原因になっているのが、ネーション・ステートの発想である。ネーション・ステートは国民国家と訳されているが、その基本は一民族、一文化、一国家という考え方だ。すなわち二十世紀初頭にヨーロッパを中心に「大帝国」による異民族支配体制が解体されるとともに、各国の国造りの目標となったのがネーション・ステートだった。

だが現実には、単一民族だけで構成された国はほとんどなく、実際には大多数のネーション・ステートの実態は、中央集権体制のもと、実権を握っている優勢民族が国内の劣勢民族を抑圧し、支配するという形となっている。

共通の祖先、同一の言語、文化、宗教をもつ集団である民族は自然発生的なものだが、ネーション・ステートのほとんどは人為的で後天的なものだ。だからこそネーション・ステートにとり、国旗や国家の制定が重要となる。これにより共通の国民意識を形成するためだ。

だが西田の説く「交響楽方式」の国家・社会の発展方式——すなわち個人性の発露こそ国家、社会の発展に寄与するという考え方からすれば、ネーション・ステートは劣勢の民族の特性を活かしていないという点で、国家、社会の発展にマイナスだ。「地球村」の大前提が各国家の特性を活すことと同様に、国家の発展は国内諸民族のそれぞれの特性発揮でなければならない。

その点で注目されるのは西田の「多文化主義」の高まりであり、その背景にあるのは「文化相対論」である。「文化相対論」とは、劣勢民族のものを含めて、それぞれの民族文化には独自の価値があるという発想である。この議論が高まってきた背景には、白人文化の優越性が疑われ、西洋の近代主義の行きづまりが論じられるようになったことである。

すなわち、二十世紀は西欧的価値が普遍性を主張した時代だった。旧大陸に君臨したヨーロッパ人たちは「大航海」を通じて新大陸、中南米、東アジアを含めた、未開地域に行き、そこでの住民をせん滅するか、統治して彼らをキリスト教文化に同化させることを使命と考えた。

また敵者生存と説くダーウィニズムが、白人種たちの劣勢民族支配正当化の口実を与えたのだが、高度に発展した科学・技術の力で有色人種の文化を圧倒した欧米の文明は、エイズ、麻薬禍、凶悪犯罪の広がりなどに象徴されるように、内部退廃にみまわれ、他文化への優位性が疑われるに至った。科学・技術からは人類救済の真の価値基準が生まれてこないことが明らかになりつつある。こうして例えば人間と自然との共生を主張してきたインディアン文化の見直しが米国の白人社会の間で行われている。このような各民族の文化をも尊重するという「多文化主義」こそ、民族紛争の処方箋であると同時に、西田のいう国家の特性を生活かしての世界主義の基礎となるものだ。

いま西田哲学が再評価され、「近代の超克」が日本でも叫ばれているのは、全存在の根

底にある神や神が定めた精神法則を棚上げにして、その代わりに自我を置き、さらに自我の中心に、すべてを分析し計算しつくそうとする理性を置いた西洋の近代主義の行き詰まりによるものだ。それでは、西田哲学は「近代の超克」をどのような果たそうとしたのだろうか。一言でいえば、自我に代わって「天地の理法」に従うことを説いたのである。彼はいう。「实在の根底には精神的原理があって、この原理が即ち神である」（注20）。

そして、神が定めた精神的法則即ち天地の理法に従うのが真の自由であると次のように説く（注21）。

「動機の原因が自己の最深なる内面的性質より出た時、最も自由と感ずるのである。しかしそのいわゆる意志の自由なる者は必然論者のというような機械的原因ではない。我々の精神には精神活動の法則がある。精神がこの己自身の法則に従って働いた時が真に自由であるのである」

「自由には二つの意義がある。一つは全く原因がない即偶然ということと同意義の自由であって、一つは自分が外の束縛を受けない、己自らにて働く意味の自由である。即ち必然的自由の意義である。意志の自由とは、後者における意味の自由である」

さらに西田は「自己の性質に従って働くのが自由であるというなら、火も水も万物皆自己の性質に従って働かぬ者はない」とした上で、人間の自由と自然現象の自由の違いについて次のように説明している（注22）。

「自然現象は盲目目的必然の法則に従って生ずる。然るに意識現象は意識された現象であり、即ち他の可能性を含む」として、人間には自由意思による選択性があり、そこに責任が生ずることを明らかにしている。その上で真の自由とは、自覚して天地の理法に従うことであると次のように説く（注23）。

「意識の自由というのは、自然の法則を破って偶然的に働くから自由であるのではない。かえって自己の自然に従うが故に自由である。理由なくして働くから自由であるのではない。能く理由を知るが故に自由であるのである」

また西田は「善とは自己の真を知り、实在の法則に従うことである」と次のようにも説く（注24）。

「善の概念は实在の概念とも一致してくる。一の者の発展完成というのが凡て实在成立の根本的形式であって、精神も自然も宇宙も皆この形式において成立している。して見れば、今自己の発展完成であるという善とは、自己の实在の法則に従うの謂である。即ち自己の真實在と一致するのが最上の善ということになる。そこで道德の法則は实在の法則の中に含まれるようになり、善とは自己の实在の真相より説明できることとなる」

さらに西田は次のように説く（注25）。

「我々が理性に従うというのも、つまりこの深遠なる統一力に従うの意に外ならない」。深遠なる統一力とは西田によると宇宙の根本である神のことである。西田が強調したのは結局は「善とは神に従うこと」ということである。

統一思想では、人間の自由について「理法を離れて自由はない」と説く。すなわち宇宙

はロゴスすなわち理法によって創造されたとしている。そして人間生活においては、理法は自由性と倫理法則の統一として作用していると説く。すなわち人間は一定の法則に従いながら自由意志によって行動する。法則に従わねば家庭の崩壊や社会的混乱が生じる。法則（倫理法則）を踏まえた上で自由意志に従うのが人間の本来の生き方であると説く（注26）。

まさに西田と同じ考えである。そして「近代の超克」がいま現代の哲学界、思想界の最大のテーマとなっているのは、西洋の近代思想が、西田のいう実在の根底にある精神的法則を忘れた唯物論的、科学万能思想や神を忘れた世俗的ヒューマニズムに陥っているためといえよう。人間生活における理法の自覚とこれに従うこと——これが西田哲学や統一思想の説く「近代の超克」の最も効果的な処方箋だといえよう。

(注)

- 1 読売新聞 93. 2. 17 「論説」
- 2 岩波文庫 『善の研究』（改版）解題
- 3 東京新聞 93. 1. 1.
- 4 近衛（第二次、第三次）内閣総理大臣元秘書官、高村坂彦著『真実の上に立ちて』p. 96 徳山印刷刊
- 5 三田村武雄『戦争と共産主義』資料篇、企画院事件の記録
- 6 『世界思想』91年 2月「理論セミナー」
- 7 岩波文庫 『善の研究』p. 201.
- 8 『原理講論』第三節、創造目的、①被造世界と創造された目的
- 9 『統一思想要綱（頭翼思想）』p. 39.
- 10 『善の研究』p. 194-195.
- 11 同上 p. 196.

- 12 文鮮明講演集『為に生きる』（光言社）p. 104.
1974年 5月 5日帝国ホテルでの希望の晩餐会メッセージ
- 13 『善の研究』 p. 199.
- 14 同上 p. 199-200.
- 15 同上 p. 200.
- 16 同上 p. 201.
- 17 同上 p. 124-126.
- 18 『統一思想要綱』 p. 41-43.
- 19 同上 p. 201.
- 20 『善の研究』 p. 121.
- 21 同上 p. 142.
- 22 同上 p. 143.
- 23 同上 p. 144.
- 24 同上 p. 181.
- 25 同上 p. 187.
- 26 『統一思想要綱』 p. 47-48.